Book Review 28-4 SF ＃もしも徳川家康が総理大臣になったら

『＃もしも徳川家康が総理大臣になったら』（眞邊明人著）を読んでみた。
著者は同志社大学文学部卒。独自のコミュニケーションスキルを開発・体系化し、政治家のスピーチ指導やビジネス研修、組織改革プロジェクトに携わる。演出家としてテレビ番組のプロデュースの他、最近では演劇、ロック、ダンス、プロレスを融合した「魔界」の脚本、総合演出をつとめる。

AI が時代を席巻している。人間に変わって政治を AI に任せたらどうなるのか。それをコロナ禍の 2020 年の日本に当てはめた SF である。2024 年 7 月 26 日映画も公開されるようだ。

新型コロナの初期対応を日本は誤ったことになっている。首相官邸でクラスターが発生し、総理大臣が死亡する。政府の評判はがた落ち。そこで政府は AI とホログラムにより偉人たちを復活させて最強内閣をつくる計画を実行するのである。ここでユニークなのは各大臣の任命である。総理大臣は徳川家康。経済産業大臣は織田信長、財務大臣は豊臣秀吉、厚生労働大臣は徳川綱吉、総務大臣は北条政子、外務大臣は足利義満で、官房長官は坂本龍馬となっている。同じ時代を生きた人物たちには呉越同舟でもあるが、各時代のエリートが適材適所に配置されている。（AI の判断は入力したデータを元に行われると言われている）。

そんな歴史に名を刻む面々を寄せ集めた内閣は、迅速な意思決定を実行し、その決断力と実行力に国民は次第に酔いしれていく。

最終的にどこに着地するのか。このような小説が現れ、映画化もされるということは、如何に現状の政治家たちに国民が愛想をつかしているかという現れではないのだろうか。